第 1 号

昭和39年3月

会　報

発行　北海道高等学校
教育研究会事務局
（札幌市伏見町1872の4
札幌旭丘高等学校内）

会報の発刊によせて

本会が生れてから，ようやく一年が過ぎました。誕生したばかりの研究会の運営については沢山の問題がありますが，何とか予定した事業を終えて，ここに二年目を迎えることになりました。

いうまでもありませんが，この研究会は，高校の全教科にわたり，また北海道全体に広がる大きな研究会です。この会の動きが，会員の皆様によく理解していただき，また会員の個々のご意見が，全体の動きに反映されるためには，できるだけひんぱんに会報のようなものが出される必要があると思います。ただ現在の会の財政の状況では，ぜい沢も言っておられないので，研究大会や論文集発行などの間げきをぬって少くとも年二回位は発行したいと思っております。幸い五月下旬の役員会で，その方針も決定しましたので，今回お手もとに届けられることになりました。この第一号は，昨年のこの会の歩みを回顧するという意味で，経過報告にとどまりました。次回よりは，各支部あるいは教科部分の動きなどを盛りこみたいと思いますので，よろしくお願いいたします。

何ごとであれ，新しい仕事をすることは容易な努力ではできないと思います。この会も決して例外ではありません。すでにできている研究団体との関係，この会の性格などいろいろな問題をもっていると思います。会の目標とするところ，あるいは性格についていうならば，この会は「各教科の立場から，本道の高校教育を前進させたいと願う者の集りである」ということです。そこではあらゆる角度からの研究や発言が自由になされる場であるべきでしょう。この会が文部省の補助を受けているから，研究にも全く自由がないというならば，国庫から俸給が出ている教師はすべて独占金融資本のかいらいであると論ずるのと大差はないでしょう。こういう奇妙なロジツクに，わたくしたちはもっと強くなる必要があると思います。研究の自由を確保するためには，会員のひとりびとりの努力が大切であります。運営にあたるものとして，わたくしはできるだけ会の財政的基盤を確立し，研究においては会員の皆さまの自由な研究が交換される場としていきたいと念じております。

現在の財政の下では，各支部，各教科部会に，それだけで活動できるほどの助成金は出せない実態ですが，わずかの助成金を，よび水としてご研鑽の機会をもたれるようお願いする次第です。

北海道高等学校教育研究会々長　梶　浦　善　次

高等学校の各教科などの研究を通じて会員相互の研修と本道の高等学校教育の振興を図ることを目的として本会が設立されましてからほぼ一年になります。

この一年間，本会では，設立総会，会員の加入と組織作り，教育研究大会開催，研究論文の募集やら研究紀要の発行など，会の基盤確立に一歩一歩進んできました。いま，会員諸氏に配布されます研究紀要をもって第一年度の事業が終了する機会に，会報を発行してこれまでの経過ならびに教育研究大会の内容などを紹介し，新年度（昭和３９年度）の事業の案内を致します。

以下，「会務の概要」，「教育研究大会」の内容報告，そして，「研究紀要」や「昭和３９年度事業計画」の紹介を致すこととします。

☆会務の概要

(1) 昭和３８年５月２５日：

北海道高等学校研究会設立総会

札幌南高等学校を総会会場としまして全道各地から参加しました多数の先生方により，本会の誕生を見るに至りました。ここで役員を選出し，会長に札幌旭丘高等学校長梶浦善次，副会長に旭川北高等学校長村上正雄，札幌北高等学校大滝与三郎，札幌工業高等学校川井信男の各先生が就任致しました。更に監事ならびに教科部会長，各地方支部長が選ばれました。引き続き，本会会則の決定を見，事務局が会長の所属校である札幌旭丘高等学校に設置されて実質的な活動に入りました。

(2) 昭和３８年　７月　９日：第１回役員会

(3) 昭和３８年１０月２８日：第２回役員会

(4) 昭和３８年１２月　５日：教科部会長会議

以上の会議を経て，第一年度の事業は，1.教育研究大会の開催，2.研究紀要の発行と決定され，これを急速に推進することとなりました。

(5) 昭和３８年１２月２０日：事務局会議

前述の二事業を含めて本会の事務を遅滞なくすすめるために，札幌旭丘高等学校教務主事成田勇造先生を事務局長として市内の先生方の参加を得て事務局が発足し，その後，数回の会議をもって，本会の運営に当ってまいりました。

(6) 昭和３９年　１月１３日：研究紀要原稿依頼

(7) 昭和３９年　２月　１日：北海道高等学校教育研究大会

(8) 昭和３９年　５月３０日：研究紀要第１号配本

これが過去一年間のおもな経過でありますが，当初海のものとも山のものともつかない全くの無に等しいものから出発して，とにもかくにも本会が発足し，遅々たる歩みを続けながら，いま二つの事業を終えて第二年度に踏み入ろうとしているところであります。事務局員一同は軌道に乗りだした本会の活動に満足と喜びを感じているところです。

☆北海道高等学校教育研究大会

昭和３９年２月１日（土）札幌旭丘高等学校を会場としてこの教育研究大会が開催されました。事務局としては，どの程度会員の参加が得られるものか半ば疑いながら全体会場である講堂を整備して当日の朝を待ったのでした。ところがその懸念は杞憂に過ぎず，全体会場は定刻前から続々参会者がつめかけ予備としていた椅子までも使用する始末で満員となり，最初の大会だということと，この研究会がいろいろの意見で注目されていただけにどの程度の反応があろうかといささか心配しつゝ準備を進めて来た事務局は無事開会に漕ぎつけたことで会の前途に対して確信を深めた次第です。

大会は午前１０時から次の順序で始められました。

日　程

9.00　受　付

10.00　開 会 式

(1) 開会の辞

(2) 挨　　拶　　会長　梶浦善次

(3) 来賓祝辞　　北海道教育委員会教育長
二本木　実

北海道高等学校長協会理事長　小野謙次

(4) 閉式の辞

10.30　講　　演　　日本教育審議会会長
日本育英会理事長
森戸辰男

12.30　研究発表　　札幌旭丘高等学校教諭
大野雍熙

札幌西高等学校教諭
河西久男

12.55　休　　憩（昼食）

13.40　各部会研究協議

15.30　終　　了

参会会員の熱意によって盛会のうちに本大会が無事終了致しましたが，こゝでは出席できませんでした会員諸氏にもこの大会の内容を理解していたゞく意味で，森戸辰男氏の講演の要旨をまとめてみました。

○森戸辰男氏講演要旨

森戸先生は「高校教育の問題点」と題して約2時間にわたり，太平洋戦争後，文部大臣として，あるいは広島大学長として歩まれたなかで経験された事柄を話題にされながら現今の高校教育の問題点を簡明に指摘し，今後どうあることが望ましいかを明確に打ち出されたわけです。およそ次のようなものでありました。

太平洋戦争が終末を告げた結果として戦後の教育界は，(1)制度の面，(2)実践の面の二面で戦前と全く異なった様相を呈するに至ったのである。

(1)制度の面では，それまで全国を統一的に指導してきていた文部省の教育行政権は地方に分散されて，各都道府県に公選制の教育委員会が設置されこの教育委員会がその地方の初等，中学教育行政を管掌することになった。つまり，変革の根本には，中央集権的なものを地方に分散するということにあった。

次に教育の機会均等の措置がとられ，(一)男女共学，(二)通学区域制，(三)綜合制の三つが柱として実施されたのである。更に，従来あった学校を6．3．3．4のいわゆる6．3制の単線型に再編した。

(2)教育方法では，児童，生徒の自発的学習ということに重点が置かれ，それに応じたさまざまな方法が取入れられた。その結果教師が教室の隅にいるだけの存在になることも度々であった。教師の養成については，師範学校の制度が除かれてすべての大学卒業生にその条件が満されれば資格が与えられるようになった。その他，社会教育の面でも，社会教育団体の結成や活動が助長されていった。

上の教育改革の成果として評価できるものとしては，児童，生徒の(1)身体発達のための条件が整い，(2)芸能的方面や(3)技能的方面の著しい伸長，そして(4)一般教養としての学力の向上をあげることができると思う。

こういった評価をした上でなお問題点は存在しないのであろうか。

すなわち，新しい人間の育成という観点からは必ずしも成果があがってはいないということであろうと思う。一例として，青少年の非行があげられようが，身体的発達が著しいものであるにもかかわらず，精神的発達においてアンバランスをきたしているのではないだろうか。要は人間形成という点で立ちおくれていると思う。

これにもう少し立ち入って考えると，

(1)教育指導精神の空白である。教育勅語のなき後を如何にすべきか。これに対しては，教育基本法が制定されたが，その方向は教師にすらも把握されていなかった。

(2)経済的基盤が弱い。教育改革はなされたが，それを満足に運営するための財政的考慮が足りなかった。例えば，新しい制度としての中学校が発足したが財政的な裏付を欠いており，その完全な実施については懸念されたのであった。財政的基礎を十分整える必要にせまられている。

(3)教育界に対しての政治色の介入がある。組合や学生運動が，学校教育の場に入って教育の中立性

ということにしばしば問題を投げかけている。ということである。そこでは，民主教育とは，平均化の教育であるというような解釈がなされ，また，６．３制にみられるごとき新興国以外には存在しない規格統一型の教育であるといわれたのである。実は，教育はそうではなくて，一言でいえば多様性の教育でなければならないのである。

以上のことから，新しい観点に立って，高等学校教育を見直す必要が生ずるのである。

それは，

(1)科学技術教育と人間教育が併存していくものでなければならないということ。更に，(2)教育は一種の投資であるという見方である。

結論として，高等学校は，生徒の進路なり特性を生かし得るような多様性をもつようなものであること。そして制度としては，職業制を意識した分化性をもったものに質的に変化していくものであること。が真剣にとりあげられていかねばならないものである。

☆研究紀要

昭和３８年度の本会の事業は前述した通り，研究大会開催と研究紀要の発行であって，そのうち研究紀要については最初の計画として，文科系，理科系の二分冊とするということであったが，発行までの期間が極めて短いということや第１号の意味からも一冊としてまとまったもので出すことに修正した次第です。昭和３８年１２月から論文の募集にあたり，各教科にわたり，各地の会員から貴重な研究が寄せられ，当初予定していたページ数をはるかにオーバーして１６０ページを超える大冊となりました。

紀要の体裁，研究論文に対するページ数の割当て，あるいは校正と，事務局編集委員は，嬉しい悲鳴をあげながらもこれに取り組んで紀要の発行をみたわけです。正直にいってこれ程多数の論文になるとは予想し得なかった次第ですが，日頃多忙を極めておられる勤務の中で研究をなされて発表に御協力を賜わりました執筆者の各位には，感謝の念で一杯であります。厚く御礼を申しあげると同時に今後益々御発展あらんことを御祈り申しあげます。

☆昭和３９年度事業計画

昭和３９年度の事業については，５月２５日本年度第一回の役員会を開いて大綱を決定しました。本会が現在草創の時期であって今後なおしばらくは体制を整えていくことが必要と考えられますので，前年度に引き続いて，(1)教育研究大会，(2)研究紀要の二つの柱を設定いたしました。

(1)については，「高校教育と学習指導の近代化」をテーマとして，昭和４０年１月中旬に札幌旭丘高等学校を会場にして開催します。これには，東京から講師を招くほか，各教科部会では主題に沿って，その教科特有の問題を取上げ，時間をかけてご討議を願うこととしております。

(2)については，昭和４０年２月を目途に第２号の発行を企画し，一つは国語科，社会科，英語科，芸能科，保健体育科，他の一つは，数学科，理科，商業科，工業科，農業科，水産科，家庭科の二分冊とする予定でおります。原稿の締切りは昭和40年１月２０日です。常日頃学習指導についての実践的研究されたものを是非発表していただいて，本道高校教育の水準向上のために寄与されることを切望してやみません。

なお，本会の活動といったものを各地において認識していただく意味からも，会報は必要欠くべからざるものであります。本号を最初としてこれから年に２回程度は発行していく考えでおりますが，各支部の動きや，各教科部会の活動なども織り込んで内容を一段と充実させようと思います。折にふれてその状況を事務局までお寄せ下さい。

あとがき

会報第１号を発行するのにどんな記事をどのような形で出すのが最適であるのか，事務局編集部にとっては気の重くなる仕事でありました。とにかく，全道の高等学校関係者に本会が先生方の自由な研究発表の場であるという会の性格を十二分に理解していたゞくことがいま最も肝要なことであるというので，ご覧のようなものとなりました。多少ＰＲめいた感じがあって恐縮の外ないのですが，編集者の意図をお汲みとり下さるようお願いします。しかし，内容として，第一回教育研究大会での森戸先生の講演の大要を載せることができたのは，私達にとって大きな収穫であったと考えます。この研究会が会員相互の研鑽のうえに多少なりともお役に立つのであれば，それで存在の意義は十分確められたことになると思います。